

片倉勇輝の熱い冬

神無月ふみ

1

2 小さな電子音に、片倉勇輝は、うんざりしながら脇に手を入れた。

一五秒で計測できるという電子体温計を取り出し、表示されている数字を見て、ため息をつく。
三九度五分。

人間の体温じゃない。

勇輝は憂鬱な気持ちで、電子体温計のスイッチを切った。

自室のベッドに横たわり、勇輝は目を閉じる。熱っぽいと思った時点で、すぐに医者に行ったのだ。

四八時間以内に飲めば、絶大な効果を発揮し、熱もほとんど出ないという薬を買って服用したが、二日経ったいまも、全く治る気配がない。

勇輝は激しく咳をする。

「タミフル、全然効かねえじゃないか」

タミフルに対して耐性のついた、インフルエンザウイルスがいると聞かすが、勇輝のかかったインフル

エンザは、どうやらそれだったらしい。

高熱が出て以来、水道水しか飲んでいない。

元々、自炊をする人間ではなかったし、いま食べ物を買いに行く元気もなかった。食欲も全く湧かない。

このまま熱で死ぬか、それとも飢えて死ぬか。

どのみち死ぬことになりそうだと、考えてしまう。おそらく腐臭が漂うまで、誰も勇輝が死んだことに気づかないだろう。第一発見者は、しばらく食事ができないかもしれない。

嫌な未来を想像しているうちに、勇輝は、ますます憂鬱になってきた。

俺、いままで体調が悪くなったとき、どうしていたっけ。

いまの自分にできることはないかと、記憶をさかのぼって考えるが、何も思いつかない。

子供のころ、確かに風邪を引いたこともあった。しかし少しでも体調が悪くなると、研究所の連中

が、よってたかかって治したのだ。病気が悪化して、ひどい状態になった記憶は全くない。

嫌な思い出しかない研究所だったが、医療面は充実していた。いままで自分は、ある意味甘やかされていたんだなと、勇輝は苦い気持ちで考える。

やっぱり一ヶ月後に、腐乱死体がミイラで発見されるのかな。

真冬の場合、死体が腐ると乾涸らびるのでは、どちらが早いだろう。

暗い気分を考えているとき、玄関チャイムが鳴った。

「こんなときに……」

勇輝は頭から、寝具をかぶった。

続けて二回、チャイムが鳴る。

「誰だ」

勇輝はプレスレットを外した。

訪問販売なら、相手の思考ブロックをいじって、

3 さつさと帰らせようと思った。

4 無駄に明るい麻衣子を見なかったことにしたくない、

り、そつとドアを閉めようとする。

「こら、閉めるな」

隙間に身体をねじ込むようにして、麻衣子が中に入り込む。

「せつかく来たのに、いきなりひどいじゃないか。

あやうくドアとサンドウィッチになるところだったぞ」

麻衣子の抗議に、勇輝は疲労のあまり体温が、さらに五分ほど上昇したような気がした。

「俺はいま、最悪の体調なんだ。あんたの高いテンションに付き合えるような気力はない」

「知っている。インフルエンザだって、お前の職場の人に聞いた。だから看病に来たんだ。心配したぞ。メールを入れても返事はないし、ケータイにかけても全然出ない。思い切って職場に電話してみてよかった。見るからに、ひどい状態じゃないか」

「そのひどいインフルエンザが、俺と一緒にいると、

だがドアの向こうにいる人間が、誰であるか知り、勇輝は飛び起きる。

人間とは思えないような、シンプルなブロックの持ち主である。こんな人間など、勇輝の知っているかぎりでは、一人しかいない。

「なんで、あいつがこんなところに来ているんだ……！」

勇輝は高熱でふらつきながら、玄関のドアを開ける。

「東堂麻衣子、参上！」

そこには、元気いっぱい麻衣子が立っていた。

ぱっちりとした目と、真っ直ぐで美しい黒髪を持つ、美女である。ただし勇輝にとっては、麻衣子の美貌よりも、常人の倍はある、はた迷惑な行動力のほうが印象深かった。

麻衣子は満面の笑みを浮かべ、右手を上げて、ひらひらさせている。

勇輝は頭痛がひどくなったような気がした。

あんたにもうつるぞ。だから帰れ」

朦朧としながら追いつくようにするが、麻衣子は得意げに胸を張る。

「心配しなくてもいい。私は去年かかったから、今年はかからないんだ。今年は身体に抗体があるらしい。ま、予防接種をしたようなものだな」

「あんたのかかったインフルエンザと、型が違っていたら、関係ないと思うんだが」

「いやいや、きつと同じだ。私も熱が高かったんだから。とにかく、あとのことは私に任せて、お前は寝るんだ」

無理矢理ベッドに引っ張って行かれ、押し倒されるように、寝かされる。

動けないほど弱っていなければ、逆襲してやるのに。

熱のせいで、くだらない妄想をしそうになったことに気づき、勇輝は自分の額を二度叩いた。

その手に重ね合わせるように、麻衣子が触れてく

る。

そのまま麻衣子は右手で勇輝の手を握り、左手で勇輝の頬に触れた。

「熱が高いな。何度だった？」

やわらかい手に、どきりとする。

「三九度五分」

たつたいま、もう少し上がったかもしれないけれど、と心の中でつけ加えながら、勇輝は答えた。

麻衣子は目を丸くする。

「大変じゃないか。私がかかったときより、五分も高い。薬は……熱冷ましは、貰ったか？」

「タミフル飲んだら大丈夫と言われて、貰えなかった。それにインフルエンザのとき、解熱剤はあんまり飲まないほうがいいんじゃないか？」

「子供ならともかく、大人なら無茶な使い方をしなければ大丈夫なはずだ。さすがに四度近くも熱が出ていたら、解熱剤も飲んだほうがいい」

5 「心配しなくても、大丈夫だって。医者だって、そ

6 部屋の中には、テレビとHDD・DVDレコーダ

ー、そしてパソコンぐらいしか、電化製品はない。他の家具といっても、安物のテーブルと、組み立て式のクローゼットと衣装ケースだけだ。

一生懸命見るほどの物は何もないが、麻衣子は何故か楽しそうだ。

「初めて勇輝の部屋に来たけれど、案外綺麗だな。兄貴の部屋より物が少ないせいか、整理されている。いい部屋じゃないか」

「引越が多いから、あんまり物を増やしたくないんだ。どこへ引越しても、六畳一間ぐらいのところに住むから、物が多いと部屋に入らなくて困るし」

「しかし炊飯器がないのは、問題だな。電子レンジは、あるくせに」

勇輝は、のろのろと服を着替えながら言う。

「アメリカ人の家庭にだって、電子レンジがあって炊飯器はない。しかしアメリカ人は困っていないよ

う言っていた」

半ば自棄気味に勇輝が言うと、麻衣子は憤慨したように両手を腰にあて、ベッドサイドで仁王立ちになる。

「大丈夫なものか。現に熱が上がりまくっているじゃないか。勇輝、別の病院へ行ってきたほうがいい」

「……もう少し良くなったら、行く」

「それじゃあ、意味がない。いまずぐ行くんだ」

言いながら、麻衣子は勇輝の部屋を、漁り始めた。「バカ、やめろ。勝手に触るな」

「着替えを探しているだけだ。これから外に行くんだから、暖かくしておかなければ」

「自分で探すから、じっとしていてくれ。頼むから」

勇輝は高熱で、ふらふらしながら麻衣子を座らせ、クローゼットを開く。

麻衣子は物珍しそうに、勇輝の部屋を見渡した。

うだが」

「高熱が出ているくせに、口は達者だな。……まあいい、炊飯器は今度持ってこよう」

「そんな物があっても、俺は使わないぞ」

「じゃあ、私がときどき使いに来る」

麻衣子は平然と言った。

「私は料理を作るのも食べるのも、大好きだ。勇輝さえよければ、仕事が暇なときにでも作りに来よう。どうせ普段から、いい物を食べていないだろう？」

私も大した物は作れないが、外食を続けるより、いいんじゃないかな」

普通の男なら、綺麗な女がにこにこ笑いながら、料理を作りに来ると言われると、多少期待してしまうものだ。

しかし楽しい想像をするには、勇輝は麻衣子との付き合いは長すぎた。

麻衣子は胸を張る。

「困ったときはお互い様だ。それが友達ってものだ

るっ?」

「友達……ねえ」

引っかかりを感じながら言うと、麻衣子は満面の笑みを浮かべた。

「ここでの経験は、いつの日か私に彼氏ができたときに、役に立つはずだ。……こう言うと、お前を実験台にしているみたいで申し訳ないが、とにかく遠慮するなと言いたいんだ」

勇輝は、がっくりする。

麻衣子の言動は、いつだって紛らわしい。旅の最中も、そうだった。

少し仲良くなった人間相手には、誰にでも親切だしかも過剰に。

誤解した男も、たくさんいただろうと思うと、勇輝は不愉快だった。

ただ、麻衣子はいままで、恋人ができたことがないらしい。最初その事実を知ったときは驚いたが、

7 一緒に旅を続けている間に、理由が想像できた。

8 自分から麻衣子を置いてきたのだから、どうしようもない。

やっこの思いで、勇輝は医院へ辿り着いた。

扉を開けた瞬間、熱がさらに上がったような気がしてくる。

待合室に人が溢れていたのだ。

誰も彼もがマスクをしており、充血した目だけを覗き込んでいた。患者たちは、背を丸めて椅子に座り、時折激しく咳をしている。

間違いなく、インフルエンザウイルスの密度が高いところだろう。どんな健康体の人間でも、ここに一時居れば、インフルエンザにかかりそうである。勇輝は保険証を出し、問診票に記入したあと、患者の一人に仲間入りした。

もう一度体温を測ると、熱は三九度八分まで上がっていた。体温計に表示されている数字を見ただけで、もっと熱が上がったような気がしてくる。

永遠とも思える待ち時間を過ごしたあと、診察室

おそらく麻衣子が知らない間に、恋愛のチャンス全部自分で潰していたのだろう。もしくは麻衣子の恋愛を妨害する何かがあるか、どちらかだ。

「気をつけて行ってこいよー!」

着替え終わった勇輝を、麻衣子は心配そうに送り出した。

マンションから徒歩で五分のところに、内科が専門の小さな医院がある。今回は救急病院へ駆け込んだが、今回はそこへ行くことにした。

一緒に来て来たがる麻衣子を、医院は近いから無理矢理置き去りにしてきたが、勇輝は歩きながら後悔する。

このまま、行き倒れになるかも。

健康体のときは、ほんの少しの距離に思えた場所も、遙か彼方に思える。医院の看板も見えているのだが、歩いて歩いても、逃げてゆくように感じられた。

倒れたときのために、誰かに居てほしくなったが、

に入った。

症状を説明すると、即座にインフルエンザと診断され、簡単な診療のあと処方箋を受け取る。

薬局で処方箋を薬に替えたあと、勇輝は足を引きずるようにして部屋へ戻った。

「よかった、無事帰ってきたんだな。ベランダからずっと見ていたんだぞ」

心から安堵したような麻衣子が、戸口で待ちかまえていた。

「この鍵を持っていたら、探しに出られたんだけど。鍵もかけずに、部屋を空にするわけにはいかないからなあ。……ちゃんと薬を買ってきたか?」
声を出すのも面倒なので、勇輝は薬袋を麻衣子の目の前で振った。

麻衣子は満足そうに頷く。

「とりあえず食事しよう。用意しておいたんだ」「いらぬ。薬飲んで、寝る」

グラスに水道水を入れるが、麻衣子に薬を取り上

げられる。

「いまずく薬を飲むのは、やばいぞ。何か口の中に入れてからにしろ」

「食欲が湧かない」

「それでも食うんだ。胃が空のまま解熱薬を飲んだら、今度は胃がやられるぞ。それでもいいのか？」

確かに病気が二つに増えるのは、嬉しくない。

理性では分かっているが、考えるのが面倒になっている勇輝は、朦朧としながら言う。

「別に、いい」

「よくない！」

麻衣子は真剣な顔で言う。

「とにかくせっかくな作ったのだから、食べるんだ。

粥だから、いざとなったら流し込むように食べる」

この部屋には、米などなかったはずである。

コンロを見ると、粥の入った鍋がかかっている。

どうやら麻衣子は米を持参していたらしい。

さすがに「いらぬ」と言えなくなった。

勇輝は着替えさせられ、ベッドに座らされた。

麻衣子は粥の入った器を持ってくる。勇輝は中を覗きこんだ。

どこから見ても、ただの真っ白な粥である。具もなく、味がついているようにも見えない。

「塩、ないかな？」

「高熱が出ているときに、味つきの物を食べても、まずいだけだ。経験した私が言うのだから、間違いない。私が去年熱を出したとき、一番つまかったのは、この味なしの粥だった。騙されたと思って、食べてみる」

以前食ったときの、まずくもなければうまくもない粥の味を思い出し、ためらっていると、麻衣子が勇輝の顔を上目遣いで見る。

「食べさせてほしいのか？」

黒目がちの瞳を見ていると、落ち着かない気分になり、勇輝は目をそらす。

「……自分で食う」

10

思い切って食ってみると、意外に甘くて、うまい。水分が喉を通り抜けてゆくとき、喉の痛みも和らいでゆく。気がついたら、夢中になって食っていた。

健康体のときは、気の抜けた食い物だと思っていただけに、自分の味覚の違いに驚かずにいられない。

その間麻衣子は、ベッドサイドにテーブルを寄せてきた。

テーブルの上に、アイソトニック飲料の入った、

一・五リットルのペットボトルを三本並べ、グラスと薬を横に置く。

「もう薬を飲んでもいいぞ」

勇輝が食べ終わると、麻衣子は食器を下げる。

「いまから三分後から薬が効き始める。一時間もしれば、熱が下がるはずだ。汗が大量に出るはずだから、自分がタマネギになったつもりになって、服をどんどん着替えてくれ」

麻衣子は自分の腕時計を見る。仕事でも使っているらしい、男物のデジタル時計だ。

「六時間後に薬の効き目が切れて、熱が上がりはじめ

る。寒気がして目が覚めるだろうから、すぐに分かるはずだ。そうになったら残った粥をレンジで温めて、食うんだ。そして食ったあとは、薬が効くのを待って、汗かいて熱が下がったら、また着替えること。とにかくそれを繰り返せば、いずれ治る」

勇輝は薬を飲み込んだあと、ぼやく。

「治る前に、着替える服がなくなると思っただが」

「心配するな。私が仕事帰りに洗濯物を取りに来る。私の家で洗濯したら、また持ってくるから、乾いた順に着て行けばいい。そうだ、合い鍵をくれ。ここに来て、お前を起こさないようにしたいから」

麻衣子は、にっこり微笑んで右手を出した。

「合い鍵をくれ」という言葉だけを聞くと、色つばいシチュエーションを想像したくなる。

しかし相手は麻衣子だ。単なる親切心で言っているだけだろう。

勇輝は鍵を渡しながら、それでも一応訊いてみる。「どうしてこんなに親切なんだ」

「お前の世話を焼くのは、けっこう楽しいからだ」麻衣子は嬉しげに言う。

「お前は普段、私を間抜け扱いするだろう？ 立場が逆転するのは、気分いいぞ」

「……そうかよ」

ただの親切心からだと言われるより、微妙に悪い。勇輝は、変な期待をしなくて本当によかったと、心から思った。

「さあ、そろそろ寝るんだ。三分後に一気に熱が下がるから、早く横になったほうがいい」

麻衣子に押し倒されるように寝かされ、勇輝は布団をかぶった。

「私のない間、食べ物に困るだろうから、レトルトの粥も置いておく。中身を容器に移して、レンジで温めること。もう少し食べる元気が出たら、温泉卵も買っておいたので、それでも食べるといい。た

12 二時間後に着替え、熱を測ってみると、三七度台まで下がっていた。

勇輝は安堵したあと、気づく。

俺、まだ礼を言っていないかった。

後悔するが、今後チャンスがないわけではない。

麻衣子が毎日来ると言ったのだ。麻衣子自身の都合がつけば、本当に毎日来るだろう。

二、三日でインフルエンザが治るはずはない。顔を合わせたときに、礼を言えればいい。

勇輝は自分を納得させると、深い眠りについた。

麻衣子は毎日やって来た。

しかし礼を言う機会を失ったままだった。

麻衣子は、勇輝が寝ている間に来ることが多い。たし、起きている間に来ても、話しかけようとすると、すぐに「寝ている」「安静にしている」と言われ続けていたのだ。タイミングを計るのが難しかった。

だし、どちらも味をつけるなよ」

「……分かった」

どうにか勇輝が返事をする、麻衣子は目を細めて笑った。

「明日も来るからな。空腹の状態で、薬を飲むよ。汗かいたら、ちゃんと着替えるんだぞ」

猛烈な勢いで食器を洗ったかと思うと、麻衣子は嵐のように去って行った。

「あの、おせっかい」

呟いたものの、本当はありがたかった。

死ぬんじゃないかと思っていた二時間前とは、状況が全く違う。少なくとも死体になることだけは、免れそうだった。

身体中から汗が噴き出し始めた。時計を見ると、麻衣子の言ったとおり、薬を飲んでから三分経っている。

呼吸するのも苦しかったはずだったが、いつの間にか動けそうなほど楽になっている。

た。

それに話をしたせいで、麻衣子にインフルエンザを移してしまうのも困る。

考えたあと、勇輝は布団の中で暗い気持ちになる。

そんなこと、ただの言い訳だ。

最初に礼を言うべきだったのに、言いそびれてしまった。

以後、急に礼を言うのは変だろうかだの、ありがとうと言うだけでは、感謝の気持ちを表しきれないのではと考えているうちに、今日まできてしまったのだ。

元々、家庭的な優しさを受けたことがなかったの、調子が狂う。こういつときどうすればいいの、誰かに教えてもらったこともない。

勇輝にとって、全くの未知の経験だった。

「だからといって、このままじゃいけないよな」

いつの間にか部屋の中にあつた炊飯器を見ながら、勇輝は決意した。

すでに、ほぼ平熱になっている。
ほとんど治った今日こそ、麻衣子に、きちんと礼を言おう。

だが麻衣子は夜になっても来なかった。
仕事が忙しいのだろうか、それともまさかインフルエンザにかかってしまったのだろうか、心配になってくる。

かといって、今日は来ないのかとメールを打つのも、催促しているようで送りづらい。

明日来なかったら、連絡を入れよう。

勇輝は改めて決意し、眠りについた。

朝、目覚めると、テーブルの上に銀色に光る物が見えた。

目を擦ったあと身体を起こすと、光る物の正体が鍵であることが分かる。

13 一つの間にか戦車のキーホルダーがついていたが、

14 また熱が上がってきたかもしれない。完全に治っていないかったようだ。

勇輝は布団をかぶった。

すべては完治してからだ、自分に言い訳しながら。

出勤できるようになったのは、麻衣子が合い鍵を置いて行った日の翌日だった。

倉庫に並んだ品物を検品していると、勇輝よりも三歳年下の同僚である、新見翔太（にいみしょうた）が話しかけてくる。

「インフルエンザ、治ったんすね」

「ああ」

無愛想に返事したつもりはないが、自然とぶっきらぼうな口調になる。

勇輝の個人事情を、あれこれ訊きたがる翔太と話をするのは、苦手だった。いままでの職場でも、事に必要なこと以外、会話をした経験がないので、

紛れもなく麻衣子に渡した、部屋の合い鍵である。

勇輝は慌てて鍵を掴んだ。

金属の、ひんやりとした感触が伝わってくる。テーブルに置かれてから、長時間経っているようだ。

「……夜中に来たのか」

がっかりせずには、いられなかった。

メモ一つないところを見ると、麻衣子は何も書けないほど真つ暗な中で、洗濯物を置いて行ったようだ。勇輝の様子から、もう看病の必要がないと判断し、鍵を返したに違いない。

礼を言う計画は失敗である。

アクセサリーを外して寝ていれば、絶対に気づいたのにと後悔するが、もう遅い。

勇輝は、乾いて綺麗にたたまれた洗濯物を見ながら、呟く。

「もう来ないのかな」

口に出したとたん、自分の顔が赤くなるのが分かった。

馴れ馴れしく話しかけられると落ち着かない。

だが勇輝の心などお構いなしに、翔太は楽しげに言う。

「片倉さんの彼女から電話がかかってきたとき、取ったの俺なんですけどね、彼女、片倉さんが熱出したと聞いたとき……」

「俺の彼女じゃない」

勇輝は無然として訂正した。翔太は大げさに驚く。「まじッスか？俺、家を教えちゃったけれど、ま

ずかったですか？綺麗な声の女性が丁寧に訊いてきたから、ストーカーじゃないとは思ったんですけど」

お前が麻衣子に教えたのか。

勇輝は翔太に感謝をすべきか怒るべきか迷い、黙りこんだ。

返事をしない勇輝の顔を、翔太は、にやにやしながら覗いてくる。

「で、彼女とうまくいったんですか？」

「別に」

「まーたまた、とぼけちゃって。一人暮らしの男の部屋に女が来て、何もなかったはずが、ないでしょ？」

「俺は熱が出ていたんだよ。ろくに動くことさえ、できなかったんだぞ。なんだったら、お前にもインフルエンザを移してやろうか？」

勇輝が咳をしようとする、翔太は慌てて飛びのいた。

「それだけは勘弁してくださいよー」

翔太は悪びれることなく言う。

「でも俺が彼女に家を教えたおかげで、片倉さんはチヨコレートを貰えたわけでしょ？ もっと感謝してくださいよ」

「チヨコレートなんか、貰っていない」

粥は貰ったけれど、と心の中でつけ加える。

15 「そんなはずはないでしょ？ こればっかりは、俺も片倉さんの言葉を信用しませんよ」

16 日本ではバレンタインデーに、女から好きな男へチヨコレートを贈る習慣があることを、勇輝は普段なら覚えていた。スーパーで働いていたころ、チヨコレートの山を、楽しくディスプレイしたこともあった。

しかし高熱にうなされている間は、完全に忘れていたのだ。いままでチヨコレートを貰ったこともないので、贈られる立場から、バレンタインデーという行事について考えたこともない。

もしかしたらチヨコレートを、くれるつもりだったのだろうか。

麻衣子の様子を思い出したあと、勇輝は心の中で首を横に振る。

残念ながら哀しいほど、麻衣子はそんなそぶりを見せなかった。翔太の考えすぎである。

翔太は興味津々で言う。

「片倉さんって、見かけは派手だけれど、性格は地味っていうか、ボンヤリしていますよね。いくら熱

気持ちよく笑う翔太を、勇輝は横目で睨む。

「何で唐突に、俺が菓子を貰わなければならぬんだ。ハロウィンもクリスマスも、とつくに終わっただろう？ 子供じゃあるまいし、そんなものを貰う理由がない」

「あの……マジで言っているんですか？」

勇輝の言葉に衝撃を受けたらしく、翔太は、しばらく絶句した。

やがて訝しげな顔で、勇輝に訊いてくる。

「あの日、バレンタインデーだったじゃないですか。だから彼女、片倉さんに会おうとしたのだと思うんですよ。なのにチヨコレート、貰えなかったんですか？」

「バレンタインデーだって？」

勇輝は慌てて頭の中でカレンダーを思い浮かべた。麻衣子が部屋に押しかけてきたのは、ちょうど一週間前である。

確かにバレンタインデーだった。

16 が出ていても、バレンタインデーぐらい覚えているんじゃないですか？」

「行事に縁遠い生活をしているんだよ、俺は」

勇輝は自棄気味に言う。

「もし俺にチヨコレートを渡すつもりだったとしても、どうせ義理チヨコだ」

「そつでしょうかねえ？ 片倉さんがインフルエンザだって聞いたとき、けっこう狼狽していましたよ」

「誰にでも親切なんだよ。俺だけ特別なわけじゃない」

「そんなものですかね」

翔太は首をかしげるが、急に、またにやにやし始める。

「本当に綺麗な声だったなあ。喋り方が、ちょっと変なところも、面白くてかわいいし。片倉さんの彼女じゃないのなら、紹介してくださいよ」

「駄目だ」

即答する勇輝を見て、翔太の目が輝いた。

「もしかして、片倉さんって片思いなんですか？
うわー、全然似合わねえ……いや、あまりにも、ら
しすぎるってどうか……」

「凶暴で怖い女だから、やめておけと言いたいだけ
だ！ あんな、食い意地が張って、おせっかいな女
……」

「俺、凶暴で怖い女も、嫌いじゃないですよ。食い
意地が張って、おせっかいだなんて、かわいいじゃ
ないですか。俺、マジで告^{コト}ろうかな……」

軽い口調で言つので思わず睨むと、翔太は逃げて
行った。

一人残された勇輝は、一大決心をした。

メールを打とう。

麻衣子を食事に誘えばいい。いつも麻衣子から誘
つてきていたが、今度は自分から誘えばいいのだ。

お礼をするという立派な理由があるのだから。

17 そして折を見て、バレンタインデーのことを、訊

いてみよう。

訊いてどうなるわけでもないだろうが、少しはす
つきりするかもしれない。

別に、チョコレートが欲しいとか、そういう
んじゃないからな。新見翔太がよけいなことを言っ
から、気になるだけだ。

勇輝は慣れない手つきで、メールを打ち始めた。

食事をおごる日を、ホワイトデーにしてみた。

しかし麻衣子の指定してきたところが、串カツ料
理屋だったせいか、バレンタインデーのことについ
て、訊く雰囲気にならなかった。

それどころか、今日がホワイトデーであることに
さえ、麻衣子は気づいていないようである。

勇輝のおごりでカ一杯食べ続ける麻衣子は、本当
に幸せそうだった。

礼ができてよかったと、勇輝は心から思う。

18 しかし麻衣子の意向を無視してでも、雰囲気重

視して、フランス料理にすべきだったかもしれない
と、ほんの少し後悔した。